

郷土室だより

第145号

平成25年2月28日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 24-037

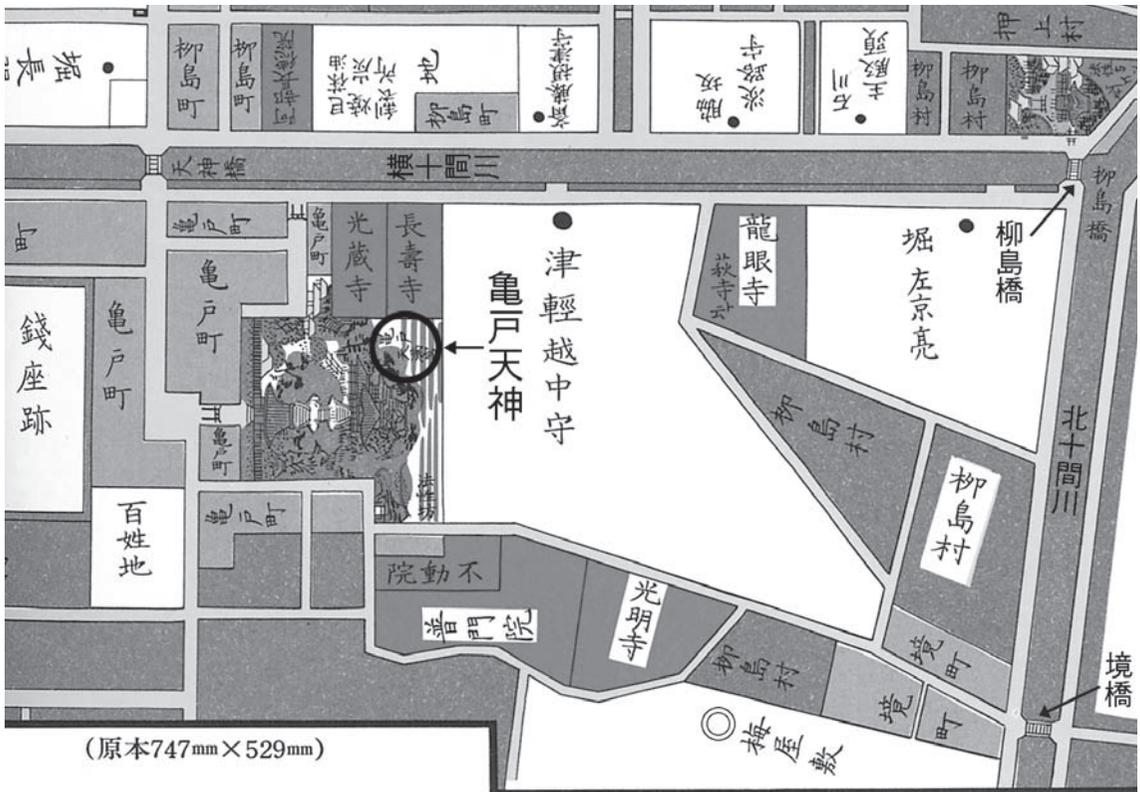
「変りゆく都市像」(23)

◇二百年前の「春」

この連載の141号(平成23年10月刊)から、明治43年(一九一〇)に童謡「春が来た」が作られたこと。その歌にうたわれた「山にきた」「里にきた」「野にも来た」のフレーズと、実際の光景とを対比させる形で、「春」と「花」と「鳥」がどのように人里にへやってきたかを、実際の東京西郊の例に重ねて、都市とその自然環境の関係をスケッチ調で語ってきました。

その最後のまとめの直前に、まったく偶然のことなのですが『遊歴雑記』という地誌を改めて丁寧に読む機会が与えられました。それは同時代の江戸の複数の他誌の読み比べを目的としたものでもありません。もちろん『遊歴雑記』は是までに必要に応じて、そのつど勉強させられた著作でしたが、改めてその全貌を知ると、実にいろいろなことを教えられる書物であることを身にしみて知りました。

どのような書物であっても、読者



『本所深川絵図(部分)』尾張屋清七板(文久3年改板)

の境遇、特にその健康状態によって影響の受け方が大幅に違ってくることは、知ってはいたのですが今改めてそのことを痛感しています。

『遊歴雜記』の実物は平凡社の東洋文庫499に収められたものを読みました。

著者は十方庵敬順じっぽうあんけいじゆん、永らく小石川小日向にあった廓然寺かくねんじの住職を務めたのち、隠居してから念願の江戸を中心とした〈名所旧跡〉を訪れた見聞をまとめてくれたことで知られた人です。校訂者は朝倉治彦氏です。「遊歴雜記初編2」に同氏は30ページに及ぶ解説をされています。

その本を刊行する際の「序」は、「山中生西寺老隱義道」というこれも僧侶による推薦文です。それには「文化第十一年（一八一四）甲戌秋八月」とありますから、来年で二百年目という勘定になります。

「春が来た」の百年目の現実Ⅱ「現在」に加えて、その百年前の『遊歴雜記』の世界との比較ができたということは、次に引用する文章一つをとって試してみても「変りゆく

都市像」の実情を非常によく物語

っているものだと思います。前口上はこの辺で。先ずは「一読を。

六十二 本処梅屋敷清香庵喜右衛門

むかし享保年間有徳院殿君（徳川吉宗）御愛樹の梅を、此処へ預け植置しめ給ふ処也、此梅古木にして、地上に横たわる事凡五六間、枝高き処丈に過ぎず、庭に這て成木し、花の咲し形は恰も睡れる蟠竜ばんりゆうに似たればとて、臥竜梅とは号け給ふとかや、花少し薄紅うすかざらにして、匂ひ又尋常よつねにあらず、根もとの太さ五尺余、されば此梅やしき広さ武町四方、春は限月の余寒もいとはず、いまだ花綻はなはなびざる頃よりも、都鄙の貴賤集ひ来り、床机もせばしと園遊せり、別して近年園中明間もなく数万株の梅樹を植込たれば、今は恰も梅園といふて可ならんかし、左はいへ隈々まで咲そろひし頃は、香風衣裳いさやうに含み、飛花空中ひるがへに翻り、雅客・文人爰に逍遊して、日の永からん事を思ふ、壺箇の壯観といふべし、立春より三十四五日目頃をよしとす、但し年の寒

暖によりて遅速あり、

この文章は二段に別れ、一段目は次に見るように「武州葛飾郡本

所の梅屋敷（広さ武町四方、現江東区亀戸）は、亀井戸天神の東北

三四町にあつて、その昔、八代將軍徳川吉宗が「愛樹 臥竜梅の管理を屋敷守の清香庵喜右衛門に命じたと、事の起こりを述べる。

以下に、原文を続ける。

一 屋敷守を清香庵喜右衛門と号せり、此宅にて臥竜梅の漬梅なりとて梅干をひさぐ、年

は、此梅やしきの事にぞ、とあります。

◇日本橋の力

將軍様御愛玩の梅の木の実は梅干にしたといえ、その希少性と貴重性ゆえに「梅干は百薬の長」以上の超特級品となる。それゆえに値段も高くなる。しかしいくら需要があつても原料は限られる。僅かの増産努力では《焼け石に水》である。

だが現実には清香庵は一年中その需要にこたえていた。それは「小伝馬町より梅干を仕送るもの」がいたからである。注意したいのはそれが原料としての「梅の実」ではなく、加工され製品化された「梅干」を「仕送る」生産者がいて一年中供給していたことである。

つまり直接の売り手である亀戸の清香庵は最高のブランド力を持つ。それを支えたのは小伝馬町にあつたとされる梅干問屋であつた。さらに言い方を変えると、その問屋は梅干の大量生産が可能なか、左はいへ花よく蹊せきをなし、又花よく人を呼よぶといへる本文

をしてその「いちば」としての環境を形成していたことを物語る。それは問屋の資金力の継続的な裏打ちが可能だった事で実現したものであったことはいうまでもない。

これが日本橋の「小伝馬町」で代表される、江戸という大都市の「いちば」の姿の一断面であったのである。

ここまで書いてきて思い出したのは戦中から戦後暫くの間、相模湾西部から伊豆半島に至る沿岸に、大きな矢印やら楕円形やらに海面に「浮き」をならべた形の定置網の連続が目を楽しませてくれた時期があった。

後で聞くとほとんどが「市場」の資本によるものだという話だった。その市場は今となっては特定できなくなったが、「東京の市場」(《築地》を思わせるニュアンス)での返事もあったことを記憶する。

梅の実のような園芸品目、貝や甲殻類の収穫品などの、当時としては農産物でもなく漁産品扱いもされない品物でも、現地の既存の専門市場が未発達な時期には、各

種の間屋が投資をかさねていたようだった。あの特徴的な定置網の連続していた童話的な沿海部の景色の存在は、漁業者の賃金高騰の結果、消滅したと聞いたこともある。

話を本所に戻すと「梅やしき」産の梅の実だけでは、誰が考えても常識的には年間販売は不可能である。しかしブランドがよければ、言い換えるとブランド力を維持発展させる経営のあり方がよければ、「常識」は《風評》の範囲に収められて、世間に《自然》に広く通用し続ける。

繰り返しになるが、「日本橋小伝馬町」という表現が意味する「いちば」というのは、現在の公設の市場施設のような構造物・施設などではなく、「常識」の《風評化》と《風評》の「常識化」という同時逆方向での永続努力が渦巻く空間であったことによる。

もちろんそれを支えた力として貨幣⇋現金・現銀の力が先に立っていたことはいうまでもない。念を押しておきたいことはこのようなことは「清香庵の梅干」に限らず、《お江戸・日本橋》を冠する

すべての業種の間屋に共通するものでもあった。

それは、かつての江戸の「産業活動」の象徴的な施設であった《駿河町の越後屋》の後裔の三越が場所も同じ元の駿河町の角地に、伊勢丹と合併して企業活動を続けている姿が21世紀の「産業活動」におけるデパート部門のあり方を象徴する。ただしこの両社共にその発祥が「伊勢」だったことが面白い。

◇都市景観の実態

都市が活動する姿というもの、肉眼で「これだ」と一目で全体が見られるチャンスはほとんどないといってもよからう。…もちろん【都市とは《いちば》なり】という命題をパツと納得させるような景観(ながめ)については、この多様にして多重的な「映像化時代」にもかかわらず、一見して納得できるような「光景」の記録には容易にお目にかかれない。

しかし二百年前の『遊歴雑記』の「清香庵の梅干」の一節は、当時の文章によって現在の「市場」

の描写に十二分に通じる効果があることがわかる。それに加えて筆者の敬順翁が今は「日本橋本町・小田原町辺にて、鮑あわびの落貝をちがいを酒糟さけがすに漬つけ込こみ運送するを、相州まのしまにてひさげば、東武えいぶの人しらずして名産とこゝろえ求めて、又東武いづつとへ土産にするが如し、見ぬが極楽、しらぬがほとけしらぬがほとけの諺ことわざもあたる哉かな」と付加えられた部分を改めて読み直せば、非常に現代的な風景に見える。

それは現在のグローバル化した地球社会の諸現象…一例としては昨年末から顕在化して話題になっている新導入の航空機787の不具合の原因究明までが、その広範な「市場」にどのように影響しているのかは、日夜報道され続けているとおりでである。

それは、まさにその昔、日本橋を取り巻く「魚河岸」の町々、つまり原文では「日本橋本町・小田原町辺」で「鮑の落ち貝」を粕漬かけに化かして、江ノ島あたりで売り出すと、それを江ノ島産だと思つて土産に買った江戸っ子の「しらぬがほとけ」ぶりとおなじ風景になる。

都市とは「人」と「モノ」と「情報」の交流の場であるという、《くくりかた》でいえば、空間的には亀戸く日本橋小伝馬町く列島某地方の梅園産地のそれぞれを結ぶ「清香庵の梅干」というブランドのレットルが通用する範囲を《都市》だとする感覚に他ならない。

さらに付加すればブランド力が強ければ強いほど、一旦それにキズが付くと見る影も無く雲散霧消するのも常例である。…しかし《腐っても鯛》という表現もある社会であることも忘れてはならないことであろう。

◇日本橋と本所梅屋敷

大幅に前後してしまっただが、この『遊歴雑記』独特の表記の本処ほんじょ Ⅱ現・江東区亀戸Ⅱ本所「梅屋敷」の清香庵の場所を、当時（二百年前の文化期）から明治中期までの約百年間にわたり「湊町・日本橋」の中心だった小網町こあみちやう（現・中央区）の河岸からの行程でいうと、「亀戸天神は本所四ツ目通り北之方五六町にあり」（『遊歴雑記』六十一）とガイドする。

その行程はすべて水路での所要時間で約一刻いっくわく（現在の二時間）ほどである。もちろん潮の干満の影響を含んだ平均値であることはいうまでもない。

もう少し詳しくいうと小網町河岸から日本橋川を下り、大川との合流点の豊海橋とよみをくぐり、左折してすぐの、当時の永代橋もくぐって上流に向かう。さらに新大橋をくぐってから日本橋浜町の対岸の堅川たかがわ（現墨田区・立川）に入り、まず本所の一之橋、二之橋、三之橋、四之橋をくぐってから、左岸に旅所橋たびしよはし（この橋の北袂の東岸に天神の祭礼の際の旅所があった）のかかった横十間川を北向きに折れて《五六町》進むと、その名も天神橋の東岸が亀戸天神への道となる。

そこで上陸して天神境内を過ぎた北東に御目当ごめあての◎梅屋敷があった。梅漬けなどを運ぶ場合には横十間川を突き当たった場所の、柳島橋から北十間川を右折した境橋あたりが梅屋敷の物揚場だった。（表紙の図参照）図は「安政二

行の『本所絵図』の部分である。天神橋のかかった運河が横十間川、この川の左方向で堅川と合流する地点の手前に旅所橋がかかっていた。◎印が梅屋敷である。

『遊歴雑記』の記述の通り、年間を通して「小伝馬町より梅干を仕送るものあり」だとすると、それはあまり目立たない舟運が適当である。いくら「小伝馬町」が馬を主軸とした運輸機関があった町にしろ、貨物を運ぶ馬と將軍様由来の梅干の取り合わせでは《酸っぱ過ぎる》イメージである。

寒中の梅花・春迎の芳香を求めて亀戸天神門前は「調理をひさぐ酒楼・食店軒をならべ高宅巧みに作り：（高層ビルを連想させる）、おのおの少婦新粧しんじやうを凝こらし媚まなみげば：（ニューファッションの若い女性のサービスに）、瓢客ひょうかくうかれぞめきて、宴をひらきてたのしめり（以下に《名物の蜆汁しんじゆ（なりひらしじみ）》のたくまぬ宣伝まで書かれて

いる）。

その盛り場を横断して梅干の荷を積んだ馬の列が通る風景ではブランドぶち壊しである。だから「荷物」は北十間川まで迂回して運ば

れた：

まさにツイッターはツイッターをよぶ情報伝播の原形を見る思い、いいかえると最新の「消費の市場」に遊ぶ思いにさせてくれるのが、この「酒嫌い・静か好き」と口癖にした『遊歴雑記』の筆者なのである。《都市とはこんなものなのだ》という声が聞こえてくるような描写は見事である。

（鈴木理生）